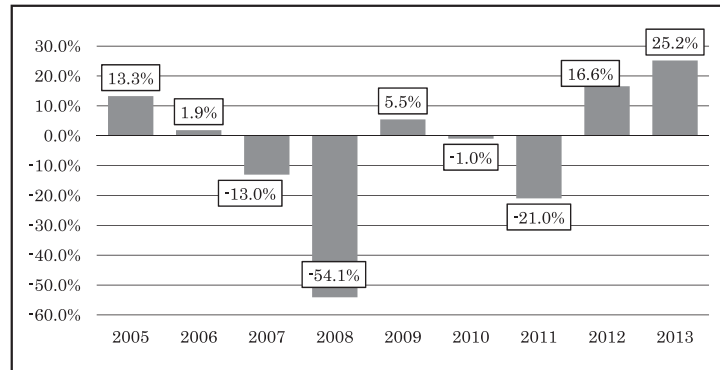


図表1 日本株式の騰落率



図表2 「未来航路two」とグローバル・ソブリン・オープンの比較

	バランス25 (未来航路two)	バランス50 (未来航路two)	グローバル・ ソブリン・オープン (毎月決算型)
期待リターン【年換算】	0.2%	0.5%	1.8%
予想リスク【年換算】	8.2%	12.9%	10.4%
リスクフリーレート		0.5%	
シャープレシオ	-0.04	0.00	0.13

「未来航路Two」は三井住友海上プライマリー生命の変額個人年金保険、「グローバル・ソブリン・オープン（毎月決算型）」は国際投信投資顧問の投資信託を指す。また、バランス25は、国内株式15%、国内債券（含むキャッシュ）40%、外国株式10%、外国債券35%を基本とするポートフォリオ、バランス50は国内株式、国内債券（含むキャッシュ）、外国株式、外国債券にそれぞれ25%配分するポートフォリオで構成される特別勘定を示す。変額個人年金保険はユニットプライスを、投資信託は基準価額を対象に、2005年4月から2013年8月までの日時データをもとに算出した。バランス50の特別勘定を指定できるタイプの積立期間は15年以上である。

「未来航路Two」はこのコストが最大で2.6%に達することが記されている。もし、保険契約者がこれまでの期間、資産運用の一端として変額個人年金保険に加入していたのであれば、図表2の利回りには満足していないであろう。「バランス25」の

POINT

- 変額個人年金保険は最低保証があるためリスクは抑えられるが、効率よく資産を殖やしたい場合には投資信託のほうが有効
- お客様の運用目的を改めて確認し、ニーズが資産運用に偏っているなら投資信託などを提案

であるシャープレシオの3項目である。シャープレシオは、「グローバル・ソブリン・オープン（毎月決算型）」、「バランス50」、「バランス25」の順に数値が大きくなっている。図表2が示すように、資産運用ということだけを考えるのであれば、「グローバル・ソブリン・オープン（毎月決算型）」

が最も効率がよいことが分かる。お客様の運用の目的を確認し投資先を再検討。ここで確認しておきたいのは、変額個人年金保険の商品性である。変額個人年金保険が消費者に受け入れられた大きな理由の一つは、「最低保証機能」が付いている

たことである。「未来航路Two」にも、支払われる年金総額が一時払保険料を下回らないような機能（年金総額保証）が付けられている。最低保証機能は、いざというとき（市場が下がったとき）保険会社がその損失補てんを行う機能であり、保険会社は市場リスクを引き受けることとなる。そのため、最低保証のため、コストを徴収することになる。

ポートフォリオを選択していたのであれば、年換算で0.2%ほどの利回りしか得られなかったということになる。ただし、最低保証が付いていたという安心感はあったと推測される。したがって、このケースの場合、アドバイスを求められたときに確認するのは運用の目的である。運用の目的が資産運用に偏っているのであれば、景気がよくなつていく過程で変額個人年金保険を保有し続けるのはミスマッチかもしれない。投資信託等での運用も踏まえて、投資商品を再検討してみるとよいであろう。

タイプ別 このようなお客様への 提案・フォローはこう行う

杉山 明
パームスコパーション(有)取締役社長

ここでは、変額個人年金を保有中のお客様への提案・フォローのポイントをケース別に解説する。

市 場が回復したといわれているが、それはここ数カ月、いわゆる「アベノミクス」効果を受け、株価が上昇していたことによる。それ以前は、2008年のリーマン・ショックによる世界同時株安・円高効果により、日本の主力である輸出産業に大きなダメージが加わったことで株安が続いていた。政権交代があった2012年以前で10%以上の株高となったのは、2005年まで遡らなければならぬ（図表1）。

したがって、市場が回復したと感じているお客様は、リーマン・ショックを挟んだ期間に変額個人年金保険を保有しているお客様である可能性がある。

資産運用を重視するならば投資信託が効率的

2005年頃に発売されていた変額個人年金保険であれば、その積立（据え置き）期間が10年に差し掛かろうという契約になっているはずだ。変額個人年金保険を保有し続けるか、ほかの商品に切り替えるか考え始めている保険契約者も少なくないだろう。そこで、この頃発売されていた変額個人年金保険を振り返ってみよう。

2015年になると一部の契約は積立期間が終了し、年金の受取りが始まることになる。

図表2で運用の推移を確認したい。「未来航路Two」からは二つの特別勘定を取り出した。債券やキャッシュの割合が高い「バランス25」という特別勘定、そして、日本の国内外の債券と株式をそれぞれ25%ずつ組み入れたポートフォリオの「バランス50」という特別勘定である。比較のために、日本の投資信託の代表格である「グローバル・ソブリン・オープン（毎月決算型）」も同様の計算を実施した。

比較した項目は、（年換算）期待リターン、（年換算）予想リスクおよび運用の効率性を測る指標

TYPE1 運用成果を重視する場合は 投資信託への切替えを提案

市場が回復したので解約を考えている50歳代のお客様